

日本におけるパリ・モードの受容の歴史は明治期にまで遡ることができるが、こと洋服を作る人々の間で、パリ・モードというものが無視することのできない規範として強く意識されるようになるのは 1950 年代のことだ。そして、それは、クリスチャン・ディオールの名前をぬきに語ることができない。

ディオールは、1947 年 2 月のパリ・コレクションに発表した「ニュー・ルック」によって名声を博し、以後、「チューリップ・ライン」「Hライン」「Aライン」など、次々に生み出す新しいラインで時代のモードを塗り変えていった。日本の新聞雑誌もまた、敗戦からの復興の兆しが見え始める 1950 年代になると、ディオールの新しいラインをさかんに取り上げるようになり、1953 年には、パリからディオール専属のモデル一行を招いて「ディオール・ファッション・ショー」まで開催されている。猪熊弦一郎や中原淳一がこの時語った言葉に示唆される通り、ディオールは、当時の日本の服飾界にとって、パリ・モードの代名詞であると同時に、ファッション・デザイナーのあるべき理想を体現する存在であった。

しかし、そこには、一つの葛藤もあった。ディオールのデザインがいかに素晴らしくとも、その模倣に終止するなら、彼のように真に独創的なデザイナーたりえず、また、欧米人と日本人との体型差を無視してそれを真似ることには限界もある。さりとして、洋服の歴史の浅い日本にあっては、パリ・モードを全く無視して洋服をデザインするというわけにもいかない。本発表の最後に紹介する ADファッション・センター・グループによる日本独自のモードを生み出そうとする試みは、短命ながら、こうした葛藤を背景に立ち現れた、パリ・モードの支配に対する確かな抵抗であったと言えるだろう。